

又吉栄喜初期作品における〈少年〉をめぐって

——施政権返還後の沖縄文学の動向

柳井貴士

一、はじめに

沖縄の戦後文学は〈アメリカ〉との接触を重要なテーマとしてきた。沖縄の戦後史もまた米軍との関係において語られ得るが、それはアメリカによる戦争を含めた対外政策と強く関連していることはいうまでもない。アメリカの対沖縄政策は「軍事的必要性を優先させて、あえて沖縄の排他的軍事支配」⁽¹⁾を遂行するものであった。特に、対日講和条約第三条で沖縄は日本から分離され施政権を認められたアメリカは、中国改革の成功、朝鮮戦争の進行とともに、沖縄を太平洋の要石としていく。⁽²⁾米軍による〈支配〉に始まった沖縄戦後史は、ベトナム戦争、施政権返還を通して様々な相の〈アメリカ人・兵〉を目的の当たりにし、⁽³⁾また文学という営為の中に刻印してきたといえる。沖縄の戦後文学は『月刊タイムス』一九四九年三月号に発表された太田良博「黒ダイヤ」を嚆矢とする。⁽⁴⁾しかし本作は独立運動下に

あるインドネシアを取り上げた作品であり沖縄も〈アメリカ〉も扱われていない。仲程昌徳は江島寂潮「道草」⁽⁵⁾の中に、戦後沖縄文学における〈アメリカ〉との遭遇として「自動車」と子供たちの「ハロー」の声を見出す。⁽⁶⁾

日曜なのでアメリカの自動車が頻繁に往来している。子供たちが道ばたに立つてハロー、ハローをする。或る自動車は食いち残りのパンを紙に包んで投げ与えた。包んだ紙が、空へ飛んで裸のパンが埃の多い道ばたに落ちる。「道草」

〈アメリカ〉はここから様々な位相を持つて沖縄の戦後文学にあらわれていくことになる。例えば、アメリカ男性と沖縄女性の付き合（亀谷千鶴子「すみれ匂う」『うるま春秋』一九五〇・七）、支配者としての権力行使（川瀬信「流れ木」『琉大文学』一九五四・二）や霜多正次「孤島の人々」『新日本文学』一九五四・一など）、「パンパン」といった女性群像（喜舎場順「暗い花」『琉大文学』一九五五・十二など）、混血児の表象（福地恒夫「風と風葬」『琉

大文学』一九六〇・十二や譜久村毅「ある歪み」『琉大文学』

一九六二・六など）、米軍基地の街をめぐる群像（濱岡獨「藁人形」

『新沖縄文学』一九六九・五や、長堂英吉「桑梯子の墓」『新沖縄文学』

一九六九・八、前川邦昭「ネオンの村」『新沖縄文学』一九七〇・一な

ど」といった作品群が、沖縄戦後史と関わりながら発表されていくのである。さらにコザ騒動、施政権返還を経て「占領統治の終焉と関わる問題」と「新県人」としての出版に関わる問題」が浮上し、「アメリカ時代から日本時代へと大きく変化しようとする時にあたって、沖縄戦が浮上、再点検を迫られた」こと⁽⁷⁾で、嘉陽安男「美原オトの場合」、長堂英吉「我羅馬テント村」⁽⁸⁾といった戦後の米軍収容所を題材に、「良い米国兵」（前者）、「悪い米国兵」（後者）を描く両極端な作品が登場してくるのである。このように沖縄の戦後文学は「アメリカ」と出会い、受容または拒絶し、他者として捉えていく過程でもあるだろう。

本論では又吉栄喜の作品を取り上げる。又吉の初期の作品は他者としての「アメリカ」を捉えながら、一方で「沖縄」へのまなざしが向けられる場合が多い。そこで又吉初期作品の中から、作品群の特徴といえる「少年」のまなざしを取り出し、施政権返還とベトナム戦争により弱体化した米国を踏まえたといえる「カーニバル闘牛大会」⁽¹⁰⁾、「パラシュート兵のプレゼント」を分析の対象としたい。米国施政権返還と日本復帰という歴史的事案を通して、沖縄自体を客観化する作品として、また米国支配の断絶を見るのではなく、その

継続と変化の表象された作品として、各作品を考察していく。

二、初期作品群とその時代

宮城悦二郎は戦後から施政権返還までを四期に分け、その第四期について「六八年、初の主席公選が行われ、屋良朝苗が当選、七〇年二月「コザ騒動」が発生、米軍人車両八〇台余が路上で焼き打ちに合う」と指摘する⁽¹¹⁾。「コザ騒動」は首都圏の新聞でも大きく取り上げられ、例えば『朝日新聞』は一面で「コザ（沖縄）で反米焼打ち」、二面では「人命軽視に怒り暴発」などと報じ、〈アメリカ兵〉のこれまでの犯罪にも言及しながら、騒動の発端となった事故への同情的言説を展開している⁽¹²⁾。ここには、〈アメリカ〉によるベトナム戦争の泥沼状態と鬱屈とした〈アメリカ兵〉の存在、一方で平時でありながら戦争と連続した沖縄という場所の前景化がある。

さて一九九五年下半年芥川賞を受賞した又吉栄喜「豚の報い」は沖縄の基層文化を軸とした作品といえる。だが又吉の初期の作品群には戦後の〈アメリカ〉をめぐる問題を焦点化したラディカルな作品が多々ある。又吉の小説家としてのキャリアは短くない。一九七五年に第一回「沖縄文学賞」を受賞した「海は蒼く」をはじめ、一九七八年には「ジョージが射殺した猪」で「九州芸術祭文学賞」、一九八〇年には「ギンネム屋敷」で「すばる文学賞」を受けている。また七〇年代後半から八〇年代前半には「カーニバル闘牛

大会」(一九七六年第四回「琉球新報短編小説賞」)、「パラシュート兵のプレゼント」など多くの作品を発表している。又吉自身が述べるように、その原体験には「軍作業員やAサインバーのホステス、基地のメイド、そういった人々を含めての「米軍的世界」が原風景として定着している⁽¹³⁾」。初期作品群は、沖縄で生活するそういった人々を中心に置きながら、闘牛(「島袋君の闘牛」といった文化や、米軍との対立構図(「憲兵闘入事件」)の中に、又吉の〈沖縄〉をとらえる視点が示されている。他者としてあらわれる〈アメリカ兵〉との階層化と同時に、内なる〈沖縄〉の階層化(混血への差別、本島と諸島の差異など)——「シェーカーを振る男」における登場人物の葛藤は、暗鬱な多様性の物語としてあらわれる。

又吉栄喜の初期作品の特徴として、仲里効は「カーニバル闘牛大会」⁽¹⁴⁾、「パラシュート兵のプレゼント」⁽¹⁵⁾、「憲兵闘入事件」⁽¹⁶⁾、「島袋君の闘牛」⁽¹⁷⁾を挙げ、「少年の目」が社会相を照射していると指摘する。また、「外部」を取り込んだ⁽¹⁸⁾点を評価し、その系列に「ジョージが射殺した猪」⁽¹⁹⁾を挙げている。米軍的世界を原風景に持つという又吉は「沖縄人を米国から見ればどうなるかを考えれば、沖縄人がより鮮明に見えてくる」と考え、「弱い米兵、軍人として使いものにならない者を仲介させて」、「ジョージが射殺した猪」を創作したと述べているが、それはキャンピングザのゲート近くで育った又吉自身の体験が創作の土台となっていることをあらわす。とりわけ「カーニバル闘牛大会」に関しては「米国人と沖縄人との葛藤を通

して沖縄の人間像を掘り下げることがあるが、従来、米国人と沖縄人との対立・葛藤を、抑圧Ⅱ被抑圧という単純な図式で捉えることを排して、それらを個々の人間の対立・葛藤として捉え直そうという⁽²¹⁾」特色もみてとれる。後述するように又吉は沖縄という内部へのまなざしを重視した書き手だといえるのである。

又吉初期作品群は、施政権返還がなされ、また相対的に〈アメリカ〉が後退する時期に書かれている。そこにはベトナム戦争下の〈アメリカ〉の後退に象徴される〈弱いアメリカ〉が捉えられる素地があり、米国兵を抽象的に捉えるのではなく、個別化した存在として描く意志が見受けられるのである。

三、少年の視点——視点人物における「内部」

仲里効が指摘したように又吉作品でまず重要になるのは「少年の目」である。

「カーニバル闘牛大会」⁽²²⁾は一九五八年に行なわれた米琉の親善行事、米軍カーニバルで起きた事件をめぐる物語である。闘牛大会会場付近で、闘牛の角により自動車をつけた「南米系らしい小柄な男」、自動車を傷つけた牛の「手綱もちの沖縄人の男」、その衝突を見守る〈少年〉の見知った大人達、事件を収拾させたマンズフィールド氏を、〈少年〉の視座でとらえた作品といえる。

「北中城村在の瑞慶覧体育館横で特別に闘牛大会」が催される。

それは〈アメリカ〉と沖縄が〈親善〉的關係にあることを象徴する催しであるが、「米軍カーニバルには万遍無く全島に巣くつている米軍基地の重い幾十ものゲイトが沖縄の住民に解放される」以上、ここには支配／非支配の關係が潜在化する。視点人物の〈少年〉は、「本物の大砲や戦闘機や戦車などを見たり、触れたりするのを朝の二、三時間であきてしま」い、関心もさほどなかった。友人の秀雄が誘う米国のアイスクリームにも関心がなく、むしろ、「ウーカイ（精霊送り）」の夜更かしにより、「少年の胃にまだ餅やら、蒲鉾やら、肉やら、砂糖黍の甘みやらがもたれ」ていた。ここでは少年の身体を通して、基層的食文化が前景化していく。

本作品で重要なのは〈少年〉にとつての〈大人〉の存在だといえる。アメリカ／沖縄の相対性だけでなく、沖縄内部への視座がその特色だといえる。闘牛と自動車の接触事故は、所有者である米国人が闘牛会場近くまで車を乗り入れたことによる。「やけに鼻の大きい、その鼻さえ見なければ沖縄人とみまちがう、「南米系らしい小柄な男」が、牛の手綱を持っている沖縄人の男にわめきちらし、「ここらもち、遠巻きにしている老若の人々は周囲の人と目をあわせたり、うなずいたり、小言で何か言いあったりしながら、外人を見たり、手綱もちを見たり、牛を見たり、そして黒い外国車を見たりしている」のである。〈大人〉たちの視線は支配者たる〈アメリカ人〉への焦点化を避け、一方「沖縄人の体軀と変わらないチビ外人の一人舞台」となった事故現場から、〈少年〉は身体の近似を越

えた所に存在する権力を感知している。数の差なら、「チビ外人」を取り囲む〈大人〉たちの方が有利である。例えば、闘牛の手綱持ちの青年に対して、「牛を闘わせている時の青年のあの威勢のよさが嘘のように感じられ」、「今、自分が闘わないのはどうしたことだ。どうして、こうも変わってしまったのだ。手綱をとりながら、敵の目を盗み、卑怯にも相手牛の目に砂をかけたり、鼻をなわでぶつたりする」という噂のある男が、こうもおとなしくなれるのか」という〈少年〉の違和感が表明される。〈少年〉は権力機構上の支配者である「チビ外人」への嫌悪よりも、その周辺の〈大人〉たちへとまなざしを向けるのである。

- ① 百人近い人垣は立ちつくしている。身動きもほとんどない。どうしたんだ、みんな。少年は人々をみまわす。同郷の人がいじめられているんだ。たった一人じゃないか。どうしたんだ。
(二二三頁)
- ② 万に一つもチビ外人に敗けるはずがない。どうして喧嘩しないのか。少年は不思議がる。味方が百人もいるのに。(二二六頁)
- ③ 何も文句を言わず、手を出さず、じっとしておけば、すべてが丸くおさまる。これは絶対の自信になっている。自分が耐えればうまくおさまる。手綱もちも耐える。周囲の人々も耐える。何も苦痛ではない。(二二二頁)

- ④ 一人と残らず、めくらめつばうに暴れる。少年は思った。なら、僕も暴れる。少年は大開きのチビ外人の口に大きな石でも

強引につっこみたくなる。石。そうだ、石を牛に投げ、暴れさせ、外国車を壊してやろう。徹底して壊せば、もはやチビ外人も文句は言わないはずだ。石を探した。一個もみつからない。残念がる反面、わけのわからない安堵感が出た。入念に再び探す気はない。群衆の無力さは子供にも劣る。(二二二頁)

ここでの「絶対の自信」は、手綱持ちの青年を含めた〈大人〉たちに共通のものとして〈少年〉に感知される。米国人の振舞いに納得いかなながらも、暴力を含んだ行動を起こさない〈大人〉たちは、作品内の時間である一九五八年と一九七〇年の「差」を内包している。一九七〇年二月二〇日未明の「コザ騒動」は、糸満で発生した轢殺事件処理への不満や毒ガス兵器備蓄への抗議が重なり「民衆そのもの」を主役として発生したが、一九五八年時点での暴動はテキストに刻印されない。軍用地問題の高揚、キャラウェイ高等弁務官の「自治は神話」たる発言にみられる抑圧された「歴史」そのものが、〈少年〉の齒がゆさとして記されるのである。牛の角による接触事故(事件)は、米人のマンスフィールド氏が登場し、住民の訴えを聞き入れ「チビ外人」に非を認めさせることで着着をみせる。しかし〈大人〉たちが「マンスフィールドさんと一定の距離をお」き、「二様に安堵はしているが、あたりまえのすじみちで、特に喜ぶほどのものでもない平然さが察せられる」のを見て、「これらの人々も、マンスフィールドさんをきつと不気味に思っているのだ」と〈少年〉は考える。「不気味」な抑圧者としての地位は揺

るがないのである。

岡本恵徳は「従来の作品が、米兵と沖縄人の対立する状況を描くとき、視点が沖縄人の側におかれるために結果として米兵の描き方が画一的になることが多かったのに対して、この作品はその弊を免れている」⁽²⁴⁾と指摘するが、ここで更に注目すべきは〈少年〉の志向する対象であるだろう。

外人が闘いをいどむなら、いつでもうけて立つという牛の内心は、黒い肉体をぶるんぶるんと大きくゆすっているしぐさから察せられる。目は黒く澄み、うるおっている。常勝の者の目。白象と自信にささえられた目。真の勇者のもつ、やさしい大きな目。そして角。無敵の象徴。この世のいかなる強敵にも絶対の自信でたちむかる、この土色^{ママ}がかった白い固い角だ。少年は牛を見、漠然とだが、そのように感じた。まわりに大勢、寄り集まっている人が、幼児のようにみえた。劣等で非力にみえた。(二二四頁)

沖縄の文化に根付く闘牛は、⁽²⁵⁾〈少年〉にとって「真の勇者」、「無敵の象徴」であり、対して〈大人〉は「劣等で非力」なものとして映るのである。〈アメリカ兵〉と沖縄人の対立関係を捉えるのではなく、内部へと向けられたまなざしは、〈少年〉に「小さい時から昼夜、懸命に育てたはずの牛を、負けたから牛肉にになってしまう飼主の心情がしれなかった」と思わせる。〈少年〉の憧憬対象に近い闘牛に対する〈大人〉の仕打ちへの違和感は、牛を支配する〈大

人」を、さらに支配する「アメリカ人」への屈折した感情としてあらわれる。

あの時、マンスフィールドさんは怒るべきだったと思う。血をしたたけで、闘わす手綱もちや飼い主や、大会主催者を、興味深くみている観衆を、その闘っている闘牛をさへ。今、このチビ外人を怒るより、あの時、怒っていたほうが、より自然だと思う。又、同国人を怒るより外国人を怒るほうがすじが通っていると思う。(二二六頁)

〈少年〉のまなざしは〈アメリカ〉という他者を捉えるだけでなく、自身が身を置く沖繩の内部へと向けられているのである。占領への違和感と、自らの内部への違和感を〈少年〉の視座が看破する。それは施政権返還による米軍統治時代への客観視ともいえるだろう。つまり一九七二年施政権返還からの時間経過が沖繩内部への内省を可能としたのである。〈少年〉のような視座が文学作品として表象されるのがこの時期の特徴であり、その意味で単線的な視座を拒絶し、複層的な沖繩の相を描く作家として、初期の又吉栄喜を位置付けることができる。

四、少年の視点——視点人物における「外部」

「パラシュート兵のプレゼント」にはスクラップ拾いをする少年たちがえがかれる。この作品には戦後に生まれ戦争未体験者である

〈少年＝僕〉の無邪気さが漂う。⁽²⁶⁾

ある日、少年たちは〈アメリカ兵〉のパラシュートの降下訓練に直面し、隊を離脱して降下したある〈アメリカ兵〉に出会う。「死んでいたらなあ。帽子も多くのバッジも手に入るかもしれない。パラシュートの布だって、紐だって。絹だから女たちは喜ぶだろう。米兵は不気味だ。ふと、思う」とあり観念的な死と実際の米兵への違和感が表われる。〈僕〉やリーダー格のヤッチー、行雄たちにとって米軍の放つスクラップは、「部落近くには爆弾は落ちてこないが金網をこえて破片はよく飛んで」きて、「懸命にそれらを探し、奪いあう」ものである。「大人のこぶし大の固まりを手の平にのせた時の重量感なんともいえない」。〈僕〉たちの身近なところに、米軍は存在している。⁽²⁷⁾

パラシュートが白く大きくひらき、果てもしれない青い空からゆっくりおりてくるさまは見事だった。授業中の窓からも数回見た。そのような時、僕らの騒ぎを怒ってしずめる本島出身の若い男の先生がいまいました。ますます、授業なんてくだらんと僕は思った。しかし、それにもまして実弾投下には僕らは魅力を感じた。(二三九頁)

戦後に生れ、基地という空間を所与ものとして受け入れる(受け入れざるを得ない)視点人物〈僕〉には、米軍への拒絶感よりも「魅力」を感じる心性が示されている。しかし、だからといって、〈僕〉は米軍を受け入れはしない。米兵による訓練はベトナムの戦

場に直結している。〈僕〉は沖縄がかつて戦場であつたことを無化したわけではない。

一般にガード兵は用心深いのか、僕らを軽蔑しているのか、僕らとかなかなかなじまない。あの、でかい鼻のガード兵に限らない。かわいそうだと感じる。(中略)あのソーメン箱の頭蓋骨をガード兵につきつけ、ガード兵と頭蓋骨を交互に指さし、ユー、セイム、ユー、セイムと押し殺した声で言い、お前もやがてこんなになるぞとおどかしたいと、僕は何度もある時、思った。(二四六頁)

固有名の無い一般化された兵士との出会いは、その無名のガード兵への怒りに似た感情として表われる。未だに残る沖縄戦の痕跡を、無名の兵士に向けて〈お前も同じようになる〉のだと迫る。同時に〈僕〉は沖縄の地が、ベトナム戦争とその戦場に隣接していることを感じているのである。

〈僕〉たちが、訓練途中に怪我をし助けた〈アメリカ兵〉には「チェンバーズ」という固有名が与えられている。固有名を持つ兵士との出会いは、個別的、具体的な感情を喚起することになる。⁽²⁸⁾〈僕〉は固有名を持つ〈アメリカ人〉に心的な接近さへ示すのである。

カルフォルニアにいるチェンバーズの妻や子はチェンバーズからの送金で生活している、と二時間ほど前、僕らがチェンバーズを待っている間にヤッチーが話した。チェンバーズは僕らが

考えていたように金持ちではないようだ。チェンバーズの両親は二人共、チェンバーズが幼少のころに、病死している。チェンバーズ、元気をだせよと僕はなぐさめてやりたい。英語が話せたらと思う。ほかの米兵たちは陽気で生き生きとしているのに。むしろ、乱暴でさへあるのに。チェンバーズはおくびょうなのかな。僕は茶碗酒を口に少しふくんた。にがい。しかし、ゆっくり喉におとした。喉が熱く、ただれるようだ。(二六七頁)

支配者の相であり、交わらない〈他者〉として認識されるのではなく、一般化された〈アメリカ兵〉から距離を置き、「おくびょうなのか」と心配される〈アメリカ兵〉が描かれるところに、本作の特徴が見出せるだろう。それは圧倒的な力を誇示して沖縄を支配した、とりわけ土地の収用や島ぐるみ闘争、瀬長亀次郎市長への弾圧などが表面化した一九五〇年代とは一線を画している。カービン銃を持ち、住民に威圧的に対峙する米兵の抽象的な姿ではなく、ここでは〈僕〉のまなざしにより輪郭化された関係が見出されているのである。

それは、また〈アメリカ・軍〉の変容に起因した事態でもある。「沖縄住民の自治拡大への要求は、アメリカによって次々に容れられてきた。しかもそれは、アメリカがすすんで妥協した結果ではなく、多くの場合は住民からの圧力の結果であつた」と宮城悦二郎は米国紙の記事を報告する。⁽²⁹⁾一方、ベトナム戦争においては「軍事的

勝利をうることはできないことは誰の目にも明らかになりつつあり、戦争への際限ない拡大は国内の反戦運動を増長させ、「ベトナム政策を足元からゆさぶりはじめた」のであった。⁽³⁰⁾

自治の拡大と、米国のベトナム戦争からの後退という出来事が、本作の〈僕〉の背景として指摘できるのである。他者としてではなく、個別の人間として〈共生〉する可能性が「パラシュート兵のプレゼント」には示されている。

ところで、〈僕〉たちの村には聖域としての〈泉〉が存在する。「蘇鉄の群生している崖つぶちを海岸におりる途中の大きな岩の割れ目」にある共同体の〈泉〉の湧水は「どんな旱魃でもかれない」のである。そこは中学三年になるマスコたち、女性が水浴びをするため、〈僕〉にとっては性的なものを秘めた場所でもあった。

チェンバーズを助けた代わりに、〈僕〉の村には、ジープいっぱいの砲弾の殻が運ばれた。チェンバーズは翌日、嘉手納基地に移動し、ベトナム戦争へと出立するのである。

チェンバーズはまちがいなく泉ににいるにちがいないのだ。ヤッチーに言ってもらおう。ヤッチーは賛成するだろう。チェンバーズにプレゼントしようと危険な思いをして芋畑に入っただから。そして、今さっき、酒にもさそったんだから。

(二七七頁)

チェンバーズのアメリカでの生活・家族構成を知り、親密さを抱く〈僕〉にはチェンバーズの善意ばかりが感知される。〈泉〉は共

同体の聖域であり、また思春期の象徴でもある。それをチェンバーズに教えることを、リーダー格のヤッチーは「それやならんろ、誰にもいふなよお、わかるな」と、語気を強めて厳しく拒絶する。米兵としてベトナムに派遣され、戦わねばならないチェンバーズは、個別化されてもおお、〈他者〉でしかないヤッチーは判断する。共同体内部の枯れない〈泉〉は、彼らの生活の根源であり、また性を含む存在であり、それは生命を象徴するものである。固有名を持つチェンバーズへの親和性を表層的なものとして切り捨て、〈泉〉に示される内部への通路を閉じるヤッチーの態度に、〈僕〉は戸惑いとともに、理解を示す。

「外部」のものとして拒絶されなければならない一線をヤッチーは固持する。そこには沖縄戦から続く〈アメリカ兵〉との関係の爪痕が潜在化しているのである。これまでみてきたように、沖縄の戦後史は〈アメリカ〉による与奪の両義性によつてなされたといえる。ヤッチーが拒絶する背景に〈奪う者〉としての〈アメリカ〉がある。彼は仲間内では英語を上手く話す人物であるが、個別化されたチェンバーズとの〈共生〉は拒否した。〈与える者〉としてあらわれながら、また〈奪う者〉としての側面は忘却されないのである。そのヤッチーを〈僕〉は否定することができない。拒絶された〈共生〉の重みを捉えなおす可能性を「パラシュート兵のプレゼント」は示しながら、その不可能性の淵で物語は終わるのであった。

五、おわりに

又吉初期作品において重要な役割を果たしたのは「少年の目」だといえる。「少年」のまなざしによる「大人」への違和感が描かれた。それは占領状況を内在化し所与のものとして受諾する共同体への違和感としても発せられた。

「カーニバル闘牛大会」では、「闘牛」文化を見る「少年」のまなざしと「大人」たちの打算が対立した。闘牛を「無敵の象徴」として憧れる「少年」の目には、闘牛文化を牛耳る「大人」は「劣等で非力」な存在として映った。「アメリカ」の施政権返還が成された後、「アメリカ」と沖縄の対立的な構図から脱し、「少年」の目は自らの内部（村落共同体）へと志向された。この内部への違和感は、一九七〇年代という沖縄の転換期とともに前景化している点が、又吉作品の特徴といえた。ベトナム戦争における米軍の後退、コザ騒動における民意の暴発、それらを「経験」した後だからこそ、戦後の沖縄史を客観化しうる視座において、内部への違和としての感触を持ち得たのである。

「パラシュート兵のプレゼント」では、沖縄戦と連続するものとしてベトナム戦争がとらえられ、また決定的に拒絶される「アメリカ兵」の存在が描かれた。ここでも「少年＝僕」のまなざしにより、共通認識を抱きうる存在として善意的に捉え得る米兵が描かれ

ながら、それはまたヤッチーという「少年」によって厳しく拒否された。

戦後の沖縄の文学は「アメリカ」との接触を無しに語ることは不可能であるが、それは多様な物語として生成されてきた。施政権返還にあたって、その影響を受けた作品は、岡本恵徳のいうように一九七〇年代半ばを過ぎてから登場してくるという側面がある⁽³¹⁾。又吉栄喜もそのひとりであり、その初期作品群には、米兵を視点人物に据えた「ジョージが射殺した猪」のようなラディカルな作品もある。それは、ここで指摘したベトナム戦争を通しての米国の後退、施政権返還という出来事が複層的に織りなす接点上にて書かれたものだとして理解できるだろう。施政権返還という時点に登場した文学作品の動向として、初期の又吉作品は「少年の目」を用いながら、「アメリカ」兵を捉え直し、また沖縄の内部を志向した作品だと位置づけることができる。

またここで触れられなかった初期の作品群、例えば「窓に黒い虫が」(『文学界』一九七八年八月)や「シェーカーを振る男」(『沖縄タイムス』一九八〇・六)、「ギンネム屋敷」(『すばる』一九八〇・二二)に関しての分析、考察が今後の課題となるだろう。

注記

- (1) 中野好夫・新崎盛暉共著『沖縄戦後史』岩波新書、一九七六・一〇、五頁
- (2) 鹿野政直は「一九四八年の朝鮮半島での分断国家の成立、翌四九年の中

華人民共和国の成立に伴う、極東での冷戦の激化を受けて、基地としての機能への注目が高まり、沖縄を復興させようとする動きが急速に起つてきます。それだけに、沖縄の「近代化」政策は、その「要塞化」政策と表裏一体の関係で進行することになります」と指摘する（沖縄の戦後思想を考える」岩波書店、二〇一・九、二四―二五頁）。

(3) 勿論、沖縄の戦後史をこれだけのトピックで語ることはできない。先の『沖縄戦後史』では一九七二年の施政権返還までを九区分し、多角的視野で語っている。

(4) 「黒タイヤ」に関しては、例えば目取真俊は「米民政府時代の文学」〔岩波講座 日本文学史 第15巻〕一九九六・五、一九四頁）において、仲程昌徳は『アメリカのある風景―沖縄文学の一領域―』（ニライ社、二〇〇八・九、一四三頁）において嚆矢である点を指摘している。

(5) 江島寂潮「道草」〔月刊タイムス〕一九四九・七

(6) 仲程昌徳「アメリカのある風景―戦後小説を歩く―」（『アメリカのある風景―沖縄文学の一領域―』ニライ社、二〇〇八・九、一四二頁）

(7) 前掲(6) 書、二四三頁

(8) 嘉陽安男「美原オトの場合」、長堂英吉「我羅馬テント村」とともに『新沖縄文学』一九七三・六に掲載。

(9) 本論で扱う又吉栄喜は施政権返還後の作家という位置付けになる。岡本恵徳は、「文学の面には、こういう施政権返還後の急激な変化は直ちには現われてはいない」と指摘し、一九七三年の「琉球新報短編小説賞」（又吉の受賞は第四回）、一九七五年の「新沖縄文学賞」、「九州芸術祭文学賞」の設立に伴い、「さまざま傾向をもった新しい書き手たちが数多く登場する」と述べる（岡本恵徳「沖縄返還」後の文学展望）『沖縄文学の憧憬』二〇〇・二）。

(10) ベトナム戦争によるアメリカ経済の疲弊は沖縄の基地経済の弱体化をまねき、例えば「コザは「沖縄市」に移行、街の活性化を試みる」（琉球新報社編「ことばに見る沖縄戦後史②」ニライ社、一九九二・三）。戦争そ

のものによる軍の疲弊もさることながら、人種差別など多くの問題が絡み、弱体化をみせたといえる。

(11) 宮城悦二郎「沖縄占領の27年間―アメリカ軍政と文化の変容」（岩波ブックレット、一九九二・八、四九頁）

(12) 『朝日新聞』（東京版、一九七〇・一二・二二）

(13) 又吉栄喜、山里勝己「沖縄」を描く、「沖縄」で描く―『豚の報い』をめぐる―（『けし風』一九九六・二、二二―二三頁）

(14) 「カーニバル闘牛大会」（『琉球新報』一九七六・一一／第四回「琉球新報短編小説賞」受賞）

(15) 「パラシュート兵のプレゼント」（『沖縄タイムス』一九七八・六）

(16) 「憲兵闘牛事件」（『沖縄公論』一九八一・五）

(17) 「島袋君の闘牛」（『青い海』一九八二・一一）

(18) 「ジョージが射殺した猪」（『九州芸術祭文学賞作品集1977』〔8〕九州文化協会、一九七八・二、後に『文学界』一九七八・三）

(19) 仲里は他に「アメリカ占領下のバーやキャバレーなどの風俗を生きる私たちの生きざまによって、アメリカとの、男と女の関係などがあぶりだされていく系列がある」とも述べるが、これは本論で指摘した長堂英吉、前川邦昭、多和田辰雄らの作品にも描かれる問題である。また仲里は「青年の目」も又吉の特徴だと述べる（仲里効「インタビュー・又吉栄喜ワールド―アメリカの影と沖縄の基層」『EDGE』創刊号、一九九六・二）。

(20) 前掲(10) 書、二三頁

(21) 岡本恵徳「受賞作解説」（『沖縄短編小説集―琉球新報短編小説賞』受賞作品）（琉球新報社、一九九三・九、三六―一頁）

(22) 引用に関しては、「カーニバル闘牛大会」、「パラシュート兵のプレゼント」は『パラシュート兵のプレゼント』（海風社、一九八八・二）を用いた。

(23) 高嶺朝一「コザ反米騒動」（『知られざる沖縄の米兵』高文研、一九八四・五、八〇頁）

(24) 岡本恵徳「又吉栄喜『カーニバル闘牛大会』——米人の新たな描き方の

出現」(『現代文学にみる沖縄の自画像』高文研、一九九六・六、一五一頁)

(25) 闘牛の文化として、例えば明治四〇年四月二七日『琉球新報』に「牛闘」として紹介されている。また東アジアに広がるネットワーク上に闘牛を捉える視点もあり興味深い(桑原季雄・尾崎孝宏・西村明「東アジアにおける闘牛と「周辺—周辺」ネットワークの形成」『南太平洋研究』二〇〇七、二七号)

(26) 「目の先には砂糖黍の密生や、こんもりとした雑木の低い茂みが点在し、その向こうもこちらもボコと海に落ち込んでいる。パラシュートの静かな、のどかな動きはよく見える。僕は、ああ戦争だ、と気が高ぶる。敵に発見されぬよう、麦藁帽子を深くかぶりなおし、また荒い土くれに腹ばいになった」(『パラシュート兵のプレゼント』、一二六頁)

(27) 一九五九年二月二六日、金武村のキャンプ・ハンセンで弾拾い中の農婦を米兵が射殺し「イノシシと間違えて撃った」と供述、一九六〇年二月九日には三和村で米人ハンターが老人を射殺、一九六一年二月一日、伊江島米軍射撃演習場内で弾拾いをしていた男性が射殺されるという事件が発生している。

(28) 先の「カーニバル闘牛大会」は第四回「琉球新報短編小説賞」の受賞作だが、以後、第五回の中原晋「銀のオートバイ」では自身が「戦後の典型」という政代という「ハーニー」などと呼ばれた女性の偏見や既成概念の破壊をめざし、また第八回、比嘉秀喜『デブのボンゴに揺られて』では、主人公「健二」の眼で、「復帰」前後の沖縄を、米軍を退役してクリーニング店を営むフレディの生き方と重ねる形で描かれる。中原の宣言にあるような典型化された問題の深化、個別化される米国兵の記述など七〇年代以降の沖縄の文学の固有の問題を提示していくといえる。

(29) 『シカゴ・トリビューン』紙(一九六八・六・四)、サミュエル・ジェイムソンの記事「弱まるアメリカの支配体制」を、宮城は報告している(宮城悦二郎『占領者の眼——アメリカ人は「沖縄」をどう見たか——』那覇

出版社、一九八二・一二、三〇六頁)。

(30) 前掲(1)書、一六七頁

(31) 注記(9)、参照